

北杜夫

「赤光」「あらたま」時代

青年茂吉

岩波書店

北 杜夫

青年茂吉

岩波書店

茂吉之像

白秋畫



青年茂吉

一九九一年六月二七日 第一刷発行 ©
一九九一年八月一〇日 第二刷発行

定価二〇〇〇円

(本体一九四二円)

著者 北^{きよ}杜^{つとむ} 夫^お

発行者 安^{やす}江^え良^ら介^{けい}

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋二五五

発行所 株式会社 岩^{いわ}波^{なみ}書^{しょ}店^{てん}

電話〇三三三六五四二(案内)

印刷・大日本印刷 製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたしません

Printed in Japan
ISBN4-00-001199-5

青年茂吉——「赤光」「あらたま」時代

まえがき

中学まで理科少年であった私は、旧制高校の魔力によって文学志望者になっていたが、私に初めて文学への眼を開かせたのは、常々書いてきたようにトーマス・マンではなく、実は斎藤茂吉の短歌であった。子供の頃ひたすら怖く煙たい存在であった父は、だしぬけに尊敬する別個の歌人に変貌したのである。私は打って変って父を尊敬するようになり、高校時代それを模した稚拙な歌を作ったものだ。だが結局は歌人になる才もなく、また詩人も失格し、つたない小説を書く身となっている。

その卑小な息子が、偉大な父について書くことはいかにも恥ずかしいことである。それゆえ私は、自分の寿命も残り少なくなった晩年になつたらと言つて、延ばし延ばししてきた。それが三年前、急に腸捻転様の腹痛から入院し、二つの病院で大腸のポリープを十二、三箇所も切除したのにつと体調が芳しくなかった。万事に大仰で気弱な私は——この点だけは父の一面に似ている——よいよその刻が来たと思ひ、あえて恥を忍んで父のことを書くことにしたのである。

また、私はほんの一時短歌を嗜つただけで、もとより歌人ではなく、短歌が分かるはずもな

い。また茂吉の研究者でもない。ただ、その子として父の生身をいくらか知っているだけのことに過ぎない。従つて、なかならず茂吉の歌の良き理解者である塚本邦雄氏をはじめ、本職の歌人の方の批評を大幅に引用させて頂いた。また時代が私の生れるずっと以前のため、これまた茂吉の生涯の研究であられる藤岡武雄氏などの御本から多くを引用させて頂いた。参考にした本はかなりにあがるが、私の本は別に茂吉の研究書ではないので、主だったものだけを末尾に記すにとどめるとにした。

一方、私の間抜けさから、また老人ボケから、再三にわたつて間違いを記した。そういう箇所を熱心な読者から指摘され教示を受けた。本来なら、初めから書き直すべきところもあるが、無理にそれを直さないほうが、読物としては私流のおかしみが出ると思い、あえてそのままにした。

本稿を草するに当り、岩波書店の編集者浦部信義さんからは、いろいろと有益な示唆を受けた。たとえば本職の歌人の説を並べるより、北さん流の解釈をして欲しい等々である。考えてみれば、短歌とて文学の一分野であり、いくら卑小な存在とはいえ私も文学者の一人である。それゆえ後半はできるだけ私流の書き方をした。また、私流のくだらぬ余談もわざと削らなかつた。従つて、我ながら首尾一貫せぬ本になってしまった。が、私の意図はたとえ一人であれ今の高校生くらいの若者にも茂吉の歌を知って貰いたかつたのである。

このたび、「赤光」「あらたま」の部分が終わつたので、それを一本にして貰うことにした。

繰返すが、私は不肖な子ながら父を尊敬している。父の歌に私なりに惚れこんで以来、私は三分の一は肉親として、あとの三分の二は第三者として父の文学に対してきたものだ。それゆえ、ずいぶんと身勝手な放言も多いと思う。

また、あくまでも私は小説家である。あと三作は死ぬまでに書き残しておきたい小説や童話がある。それを完成させなければ死んでも死にきれない。いくら三文作家とはいえ、それが文学者の業というものである。

ただ、「茂吉あれこれ」の「赤光」「あらたま」だけが、予想していたより遥かに長くなってしまったので、正直に言つてこの調子で仕事を進めると、果して何時になつたら終るのか分らなくなつてくる。それで、途中をかなり省略して、最後の「白き山」あたりに、もし健康が許せば力を注ぎたいと考えている。

父について何か書けと依頼を受けたのは、もう十六年以上前、今は新潮社を定年で止めた小島喜久江さんからであつた。その後私の担当になつた栗原正哉さんからも奨めていたが、結局、諸々の事情により、父がもっとも多くの本を出し世話を受けた岩波書店の雑誌「図書」に「茂吉あれこれ」と題して連載することになった。初めに私にそれを奨めてくださった小島さん、栗原さんにはここにお詫びする。

「茂吉あれこれ」の第一部「図書」一九八八年一月号、一九九一年一月号を本にするに当り、つれづれ

に思ったこと、並びに前述した方々に感謝の意を書きとどめておく。

一九九一年四月十五日夜

著
者

目次

まえがき

I 「赤光」時代

II 「あらたま」時代

I
「赤光」時代

墓はらのとほき森よりほろほろと上るけむりに行かむとおもふ（赤光）

私の幼い頃、自宅の隣にまあ中くらしいの大きさの病院があり、その横手に、むかし祖父が造った青山脳病院の焼跡が、かなり広い二段の原っぱとなって残っていた。

原っぱの先は立山墓地であり、更に広大な青山墓地に続いていた。私たちはこれら二つの墓地を別に区別せずに、恐がったり愉しんだりした記憶がある。二つの墓地の間の谷間は、私が子供の頃、すなわち昭和になつてからも、かなりの田畑があつたくらいだったから、この歌によまれた頃は墓地自体もずっと簡素で鄙びたものであつたと想像される。

茂吉自身、「あたり一面は原であつた。それから、直ぐ隣は墓地でそれも墓石も極めて稀であつた。肥料の匂が風のまにまに漂つて来る。それが一段低い処は一面の稲田で目高が群れて泳いで居たり、水の温むころは、蛭が思出したやうに浮いて来たりするのであつた。ある時私は崖の上から冬眠してゐて未だ醒めない蛇を掘り出したことなどもある」と書いているように、私の子供時代に比べても、ずっと田舎じみていたと言つてよいだろう。

ともあれ、昭和二年生れの私が四、五歳になった頃、墓地の印象はひたすら薄暗く、かつ湿った空気がひろがり、常緑樹の特有な匂いが漂っていた。とにかく大小の樹木の群が際限もなく連なり、また薄気味のわるい灌木の茂りもあった。のちになっての知識では、生垣にはマサキがよく使用されていたようだ。

そういう樹海の中に、大小の墓石が建てられていた。真新しいものもあれば、苔に汚れた古い墓もあり、卒塔婆が半ば倒れかかっており、ある鉄柵は赤く錆びつくしていた。辺り一面を、湿った苦いような大気がおおい、その間を、砂利や黒土の道が迷路のように交錯していた。もちろん立山墓地のほうが貧相で、青山墓地の中央の道は、相当に大通りとして整備されていたことだろう。また青山墓地のほうが概して偉い人たちのばかりでかく立派な墓が多かったものである。

冒頭の歌は、雑草の生い茂った原っぱを通り、更に彼方に拡がる墓の樹林の方角に、かぼそくあがってゆく煙に向って意欲的に歩いて行こう、という心理を現わしたものである。その気持を茂吉は、

『行く』といふのは『足の一種の運動』とのみ解して貰ひたくない。ツマリ今までの光景に、見とれて一種の心持になつて居た、考にふけつて居た。それから次の時の心持は、単にそれだけでは満足できない。堪へられなくなつて、けむりの傍まで行かうといふのである。ジ―

ツと遠くはなれて、しづかに考にふけるといふ、その度をとり越した心的状態を表はさうとしたのである」

と、書いている。

歌自体から鑑賞しようとすれば、かなり遠くの森まで行こうとしているようだが、茂吉は写生をきびしく念ずるいっぽう、独特な、ときには不思議ともいえる空想癖の所有者でもあった。

私の追憶の中では、立山墓地の中ほどに茶屋があり、よく道に落ちた朽葉を箒で一箇所にかき集めて燃やしていたものだ。いかにもほそぼそとした、あおじろいような煙だったと思う。同時に、落葉を焼くしつとりと芳しいような懐かしい匂いが漂ってきたものだ。一方、青山墓地の茶屋は墓地の外にあり、たとえ他の場所で落葉を焼いたにせよ、家からは遥かに離れているからそのような煙は見えないはずだ。それゆえ、私はこの歌が写生とすれば、ほど近い立山墓地に向けて歩いてゆく父の姿をなぜともなく連想するのである。これは時代がずいぶんと違っていても、或る程度似たようなものであったろう。

茂吉には自分の歌を自註した「作歌四十年」という本がある。

墓はらのとほき森よりほろほろと上る²けむりに行かむとおもふ

木のもとに梅はめば酸しをさな妻ひとにさにづらふ時たちにけり

細みづにながるる砂の片寄りに静まるほどのうれひなりけり

これらの歌に対し、茂吉はこの中で、

「明治四十二年の雑歌である。明治四十二年九月から卒業試問がはじまり、私は本郷に下宿したりして、その年末には卒業試問を終つたのであつた」

更に重要なことに、

「この年の傾向は大体こんなもので、歌にある種の細みを要求し、感傷を漂はさうとしてゐるやうに見える。表現の技巧も幾らかづつ自由になり、歌壇の雑誌などものぞき読みしたのであつた。兎も角これだけの力量を得るに至つたことを記しとどめて置くのである」

と、かなりの自負の念を書いている。

そういえば冒頭の歌は、茂吉が初めて伊藤左千夫の選を離れ、自分の手で「アララギ」に発表したものであつた。

もう少し解説を与えてみると、茂吉という男は野武士、野蛮人のごとき野太い神経の持主であるとともに、逆に気弱ではそぼそとした繊細な感覚の持主でもあつた。この歌はもちろんその後者に

当る。「墓はらのとほき森より」がすでに素直な抒情的なリズムであり、「ほろほろ」という副詞に至っては、少女めいた童話的な語呂と言つてよい。二十四歳にもなった青年の歌にしては、ほそぼそとしていて、かなり甘いと言されても仕方があるまい。

だが、この私も少しは父の血を受け継いでおり、躁病のときは父の三分の一ほど怒りっぽくなり、かつ旧制高校から大学にかけて、父の歌の中でもことさら感傷的なものをずっと好んだように、或る点では父と酷似した感傷家であつた。

「作歌四十年」で引用した歌、

木のもとに梅はめば酸しをさな妻ひとにさにづらふ時たちけり

は、前首よりも何かにつけ話題を呼んだ歌である。

茂吉は数え年十五歳で養父の病院に上京し、やがては長女である子の女婿となる。入籍をしたのは茂吉二十四歳、てる子十一歳のときであつたが、少年として上京した頃は、てる子はまだ幼女で、父は彼女を背負つて子守をしたりしたものであつた。そのてる子も次第に成長し、茂吉は「をさな妻」と称する歌をかなり作つてゐる。

「さにづらふ」は「君」「いも」「おとめ」「紅葉」「色」などにかかる枕詞で、茂吉の好きな言葉

の一つのようだ。

この頃のてる子はまだ少女なのに、「梅はめば酸し」を、てる子が妊娠して酔っぱいものを好むようになったとするだけでもない誤読の解釈を、むかし私は読んだことがある。

塚本邦雄氏の鑑賞文にある、

「大切なのは人かわれかよりも『木のもとに』の現実感であらう。かういふ箇処は写生の功德である。(略)彼は一つもぎ取つて歯をあてる。酸味が舌の根から頬に沁みわたる。昔、青梅を生で食べることを母に禁じられたことが胸に蘇る。幼時に還つた思ひは、おのづから、いつしか、初めて相見た頃はまた童女であつた許婚者の上に及ぶ。この春頃からやうやく処女さびびて、匂やかなものごし、彼と会つても仄かに頬を染めて、眩しさうにするやうになつた。この梅の実が熟して落ちる頃は、あの紅潮した面を、この胸に寄せてくれるだらうか……」

という解釈は、私がいちばん感心した文章である。
なお、これに関連した歌に次のようなものがある。

さにづらふ少女ごころに酸漿はなはづまの籠かごらふほどの悲しみを見し

更にこの「をさな妻」を歌つた、のちの大正元年の「或る夜」では、